身近に起こりやすい災害と向き合う

水害

水害と背中合わせ そのことを忘れてはいけない

昭和28年の大水害で水没した中島上ケ地地区
「広報やまと」平成11年6月号から転載

本市は筑後川と矢部川といった大きな川に挟まれ、市内を沖端川や塩塚川などの中小河川が流れています。市内全域の土地が低く、陸地にたまった水は、有明海が干潮にならないと排水できません。このため、まとまった雨が降り、満潮と重なると排水できなくなり、水害が発生します。本市は、梅雨や台風の集中豪雨で、水害がたびたび発生し、家屋の床上・床下浸水や、田畑の冠水などの被害が生じています。

昭和28（１９５３）年６月に発生した水害では、筑後川と矢部川流域で床上浸水５万９３３９戸、床下浸水６万２２１９戸、１７６人が犠牲になりました（国土交通省九州地方整備局筑後川河川工事事務所）。それ以降も、沖端川左岸の堤防が三橋町百町地区で決壊した昭和47（１９７２）年７月の水害、自衛隊に出動要請をした平成２年７月の水害などが起きました。

幸いなことに、近年は河川堤防の改修や堰（せき）などの防災施設の整備が進み、水害による大きな被害は発生していません。しかし平成21年７月24日から26日までの豪雨では、本市で４４１㎜の雨を記録。この年の総降水量が１７４５㎜だったので、わずか３日間で１年間に降った雨のおよそ４分の１が降ったことになります。

この豪雨により、市内の各地で道路や田畑が冠水。両開地区の明治と西六十丁で５戸の床上浸水が発生したほか、市内80行政区で２６７戸が床下浸水の被害を受けました。

水害は、本市が低地にある以上、避けることのできない災害です。そのために防災施設の整備が積極的に進められてきました。しかし、想定を超えた豪雨が降らない保証は、どこにもありません。水害と背中合わせで暮らしていることを忘れてはいけません。

福岡県西方沖地震の揺れで、崩れ落ち
そうになった御花西洋館の暖炉の煙突

台風

的確な情報収集が 被害を最小限に食い止める

平成３年の19号台風の風で倒れ道路をふさいだ電柱
（三橋町棚町沖田地区）

平成３年９月、本市は激しい台風災害に見舞われました。14日の早朝に来襲した17号台風は、最大瞬間風速50・５メートルを記録。民家の屋根に大きなダメージを与えたほか、電柱が折れ停電や電話の不通が生じました。

17号台風の被害をさらに拡大させたのが、２週間後の27日に来襲した19号台風です。19号台風は、この日の午後４時、中心気圧９４０ヘクトパスカルの強い勢力を保ったまま佐世保市の南に上陸。本市は、再び最大瞬間風速49メートルの風にさらされました。

２度にわたる台風は、建物や農作物に大きな被害をもたらしただけではありません。停電は長いところでは１週間も続き日常生活に支障を来し、大量に発生したがれきの処理にも大変な労力を要しました。

平成３年の台風では強い風が大きな被害を生みました。しかし台風は、集中豪雨や高潮、高波などの災害を引き起こします。昨年９月に紀伊半島に大きな被害をもたらした12号台風は、広い範囲で１０００㎜を超える雨が降り、大規模な土砂災害や河川のはんらんが発生しています。

台風は気象予測技術の進歩で、ある程度の進路予測が可能です。台風が近づいたら情報の収集に努めましょう。

地震

震源が遠くても 揺れやすい土地柄にある

地震は、地中深くにある岩盤と岩盤の継ぎ目に力が加わり、急激に動くことで生じる震動が、地表面に伝わって起こります。岩盤同士の継ぎ目を断層といい、日本の内陸部には、今後、動く可能性がある活断層が、２０００以上あるといわれています。

50年以内に本市で発生した大きな地震は、昭和41（１９６６）年に有明海を震源としたマグニチュード5.5の地震がありました。記憶に新しいところでは、平成17年３月20日にマグニチュード７の福岡県西方沖地震が発生。本市でも震度５弱の強い揺れに見舞われ、被害を受けた建物もありました。

県内の活断層は、主に県北部に集中しています（下図参照）。本市に最も近い活断層は、久留米市を東西に横断する水縄（みのう）断層です。県外にも、島原半島を東西に横断する雲仙断層や大分県の別府－万年（はねやま）山断層、熊本県の布田（ふた）川・日奈久（ひなぐ）断層などの活断層が、本市の近くにあります。

本市を含む筑後南部に、活断層は確認されていません。しかし地盤が軟らかいため、揺れやすい傾向にあります。文部科学省の地震調査研究推進本部は、四国沖の太平洋を震源とする南海地震で、強い揺れが発生することを予測しています。油断は禁物です。

県内の活断層